



小さな生きものがたくさん暮らす三番瀬

三番瀬は、浦安市から習志野市にかけて1800ヘクタールに及ぶ、巨大な干潟(あさせ)で、自然豊かな場所です。藻の仲間(ケイ藻)をコツメガニが食べ、そのカニを食べるために鳥が飛来し、また、大きな魚が入ってきつらいため、小さな生きものにとって楽園です。

三番瀬の生きものの数は鳥類89種、動植物プランクトン302種、ゴカイなど底生生物155種、魚類101種、合計647種の生物が確認されています。

かつて、三番瀬の魚を徳川家康さんに献上していた

広大な干潟の三番瀬

昔から漁業盛ん、家康に献上も

そつです。戦後の高度経済成長の中で埋め立てられたところもありますが、現在でも漁業は盛んにおこなわれ、栄養豊かな浅瀬ではスズキやカレイなどの稚魚がなっています。

ふなばし三番瀬海浜公園は、潮干狩りやバーベキューエリア、そしてテニスコートや野球場などのレジャースポットを備え、加えてバードウォッチングの名所でもあります。国土交通省関東地方整備局が選定した「関東の富士見百景」に選ばれており、冬場の天気の良い日には富士山がくっきり見えます。



民話「雪どけ塚の白へび」の舞台となった長福寺の裏山

船橋市内の児童が、地元に伝わる民話「雪どけ塚の白へび」をテーマに取材や写真撮影など新聞制作に挑戦した。日本財団などオールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、国内に残された海にまつわる「民話」「伝承」を選定し、子どもがさらに次世代へと伝える機運醸成を狙っている。船橋市立船橋小学校4年の仲島誠人さんが執筆した紙面を紹介する。

民話「雪どけ塚の白へび」には雪が降っても積もらない舞台となったのが、夏見(いこと)から「雪どけ塚」との長福寺がある場所だと言われていると伝えられています。長福寺は昔、雪どけ塚の白へびの戦で亡くなった人を供養では、その塚に大きなへびした塚があると言われ、その輝く目が灯台の代わりとなっていました。

漁師が建てた灯明台

第二次大戦まで利用



安全な魚を見守っていた船橋大神宮の灯明台

船橋大神宮の灯明台は12メートルの灯台が立つています。神社境内には常夜灯があり漁師たちが目印にしていたが、戊辰戦争で焼けてしまい灯台を建てていました。

船橋大神宮は1900年ほど前に創建されたといわれています。灯明台の構造は3階建てで、1、2階は和風、3階は西洋式灯台のデザインを取り入れた和洋折衷のつくりになっています。また、2016(平成28)年4月1日付けで、地域の景観上特に重要な建造物である「景観重要建造物」に意富比神社(船橋大神宮)の灯明台が指定されました。

なっている船の航行を助けたというお話です。長福寺は、船橋市夏見にあります。小高い丘の上に位置しており、都会の喧噪から離れた静かな環境が特徴です。墓地や永代供養墓、納骨堂も併設されており、静かなひとときを提供しています。

平安時代、円融天皇の時代(969年~984年)に創建されたと伝えら

れています。当時は天台宗のお寺でした。しかし、その後しばらく荒廃した時期もありました。室町時代の永禄年間中(1558~1569年)に、夏見加賀守政芳が現在の長福寺の境内地に夏見城を築城し、天台宗の僧侶、空山和尚が招かれ、再興されたといわれています。

江戸時代には、三代将軍徳川家光から観音堂領として五石の御朱印状を受領し、その後も幕末まで続けられました。明治期には戊辰戦争の戦火により本堂や書院が焼失しましたが、住職が本尊と檀信徒過去帳を持ち出したおかげで現存しています。現在、長福寺は禅宗の曹洞宗に属し、本尊の聖観世音菩薩像は船橋市の有形文化財に指定されています。

編集後記

多くの知識 得られる新聞

船橋市立船橋小学校4年 仲島 誠人さん

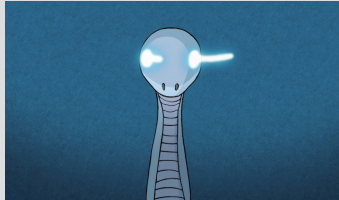


仲島誠人さん

僕は新聞は大事だなと思っていました。なぜなら新聞はいろいろ知れて良いからです。たとえば今回取材して三番瀬の広さが1800ヘクタールあると聞いた時はものすごくびっくりしました。他に灯明台が県の文化財に指定されていると聞いた時はすごいと思いました。こっぴどみんなにも新聞で知ってほしいです。新聞は面白いのでみんなにも読んでほしいです。

海と日本プロジェクト

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進している。



「雪どけ塚の白へび」のワンシーン

雪どけ塚の白へび

昔、夏見城を囲む土塁の近くに「雪どけ塚」と呼ばれる不思議な小高い塚があった。松の木の根元の穴に住む白へびは夜になると姿を現し、光る目の美しさ、やさしく気品のあるたたずまいで村人を魅了していた。ある日、出漁していた漁師が嵐に遭い、沖に流された。遠方に見つけた青い光を白へびの目だと信じて死に物ぐるいのかいをこぎ続けた…。

